

サラリーマンの生きがい対象の構造、年齢差および性差の検討

西村 純一

キーワード：生きがい対象の構造、日本のサラリーマン、年齢差、性差

欧米では、モラル (morale) や生活満足度 (life satisfaction) という操作的概念を用いて幸福な老いの程度を測り、幸福な老いの規定要因を探る研究が進められてきた (Neugarten, B.L., Havighurst, R.J., & Tobin, S.S., 1961; Lawton, M. P., 1975; Larson, R., 1978)。また、これらの尺度に共通する感情の連続体の総称として Subjective well-being という語が提案され、広く普及している (古谷野, 2003)。わが国においても、こうした欧米の主観的幸福感に関する尺度の日本版やその改訂版が作成され、わが国固有の生きがいの程度を測定する尺度として利用されてきた (杉山・他, 1981; 古谷野, 1981)。

しかし、主観的幸福感、わが国固有の概念といわれる「生きがい」と比べて、あまりに定量的に単純化されていて、「生きがい」に含まれる日本人特有の微妙な感情の質的違いを十分にとらえているとは言い難い。また、幸福な老いの結果を測定しているに過ぎず、そのプロセスを無視しているということで、欧米でも最近、批判されるようになってきている (東, 1999)。それゆえ、日本人の幸福な老いの問題を検討するためには、主観的幸福感ではなく、わが国固有の「生きがい」の側面から日本人特有の感情の質的違いをとらえる連続体を尺度として抽出し、そうした生きがい尺度を利用してその規定要因を探るアプローチが必要であると考えられる。

しかし、わが国における「生きがい」の研究は、生きがいの概念に関する議論は盛んに行われてきたが (神谷, 1966; 小林, 1989)、日常的な生きがいの程度を測定する尺度の検討はほとんど行われていない。よしんば行われたとしても、生きがいの有無を問うというきわめてラフな調査でその規定要因の詳細な検討に耐えないものがほとんどであった。

生きがいは、もともと人々の日常の生活のなかから生まれてきた言葉であり、抽象的な生きがい論議よりも、各自の日常の生活感覚に沿ってとらえることが、生きがいの本質に迫る上で重要と考えられる。そのような観点から財団法人シニアプラン開発機構のサラリーマンの生きがい調査 (財団法人シニアプラン開発機構, 1992; 1993a; 1993b; 1997; 2002; 2003) が注目に値する。この調査では、生きがいの意味を特定の解釈に限定せず、また、欧米の主観的幸福感スケールにとらわれずに、日本のふつうのサラリーマンが感じているとみられる生きがいのカテゴリーを9種類用意し、個々人に自分の感じ方にもっとも近い生きがいのカテゴリーを2つ以内で選択させている。ただし、これらのデータは基本的にカテゴリカルデータであるため、生きがいの感じ方の連続体の抽出に当たって因子分析のような定量的分析はなじまない。

そこで、筆者は、カテゴリカルデータの分析法のひとつである等質性分析 (石村, 2001; Meulman, J. & Heiser, W. 2001) を適用し、生きがいの連続体の抽出を試みた (西村, 2004)。そ

の結果、日本のサラリーマンが感じている生きがいの背景に、2次元的構造が存在することを見出した。一つの次元は、生活の安定感の方向で感じる生きがいと生活の充実感の方向で感じる生きがいを判別している。もう一つの次元は、人間的成長の方向で感じる生きがいと精神的安定感の方向で感じる生きがいを判別している。

また、これらの尺度を用いて分析した結果、日本のサラリーマンの生きがいの知覚には、次のような年齢差や性差のあることが示された（西村、2004）。第一に、男女とも年齢が上がるとともに生活充実感から生活安定感へ移行する傾向がみられた。第二に、男女とも、若い頃は精神的安定を求めているが、年齢が上がるにつれて人間的成長を求めるようになる傾向がみられた。顕著な性差は認められなかった。

ところで、神谷（1966）によれば、生きがいにはこうした生きがいの感じ方の側面と生きがいを感じる対象の側面のあることが指摘されている。そこで、本研究では、前述の財団法人シニアプラン開発機構のサラリーマンの生きがい調査のデータを用いて、生きがいを感じる対象の構造、年齢差、性差に検討を加えることを目的としている。同調査では、生きがいを感じさせる対象を12種類用意し、現在生きがいを感じさせる対象を3つ以内で選択させている。これらのデータは基本的にカテゴリカルデータであるため、西村（2004）と同様に等質性分析を適用することが可能である。

方 法

調査方法と分析対象 全国の厚生年金基金の加入者・受給者。対象者の年齢を35～44歳、45～54歳、55～64歳、65～74歳の4層に分け、各層1,100人強、計4,505人を対象とした。性別構成は厚生年金基金加入者・受給者の性別構成に準じて、各年齢層とも男性3：女性1の比率とした。なお、男性の59.9%、女性の63.1%が現役で、男性

の40.1%、女性の36.0%が定年を経験していた。また、年齢区分別の現役率は35～44歳で98.8%、45～54歳で97.3%、55～64歳で51.6%、65～74歳で4.4%であった。企業の業態や設立形態など、基金の構成を反映させて175基金を選定した。平成13年10月から12月にかけて郵送調査を実施した。有効回収数は3,189件、有効回収率は70.8%。

分析内容 本研究では、財団法人シニアプラン開発機構が平成13年に実施した「サラリーマンの生きがい調査」のうち、生きがいに関する次の質問およびフェースシートの年齢と性別のデータを分析する。

問 あなたは現在、どのようなことに生きがいを感じますか。（○は3つまで）

1. 仕 事
 2. 趣 味
 3. スポーツ
 4. 学習活動
 5. 社会活動
 6. 自然とのふれあい
 7. 配偶者
 8. 子ども・孫・親などの家族・家庭
 9. 友人など家族以外の人との交流
 10. 自分自身の健康づくり
 11. ひとりで気ままにすごすこと
 12. 自分自身の内面の充実
 13. その他（_____）
-

結 果

日本のサラリーマンの生きがいを感じる対象の構造を分析すべく、①仕事、②趣味、③スポーツ、④学習活動、⑤社会活動、⑥自然とのふれあい、⑦配偶者、⑧子ども・孫・親などの家族・家庭、⑨友人など家族以外の人との交流、⑩自分自身の健康づくり、⑪ひとりで気ままにすごすこと、⑫

自分自身の内面の充実、以上12種類の生きがいのカテゴリに関する選択・非選択のカテゴリカルデータを等質性分析によって分析した。なお、「その他」というカテゴリは雑多な意味が含まれてくるので分析から除外した。

(1) 生きがい対象のカテゴリの空間的配置

等質性分析の数量化の結果にもとづいて、選択された生きがい対象の空間的布置を示したのが図1である。なお、生きがい対象の非選択は生きがい対象の選択に比べて概してカテゴリカルスコアが小さく原点付近に位置する。そのため、煩雑になるので表示を省略した。

第1尺度は、「仕事」あるいは「配偶者・結婚生活、子ども・孫・親など家族・家庭」など社会的責任のある対象を正の方向、「ひとり気ままに過ごす」、「健康づくり」、「趣味」、「学習活動」、「自然とのふれあい」などとくに社会的責任をもたず、気まま

に選択できる対象を負の方向に判別している。したがって、第1尺度を、気ままな生活対社会的責任ある生活の尺度と呼ぶことにする。

第2尺度についてみると、「内面的充実」、「ひとり気まま」、「学習」、「友人」など内面的充実や友人との交流などに関係した活動を正の方向、「健康づくり」、「スポーツ」、「趣味」など心身の健康づくりに関係した活動を負の方向に判別している。そこで、この尺度を内面的充実対心身の健康づくりの尺度と呼ぶことにする。

気ままな生活対社会的責任のある生活の尺度のサンプルスコアの年齢曲線を男女別に示したものが、図2である。男女とも年齢が上がるともに社会的責任のある生活から気ままな生活へ移行する傾向がみられた。また、男性よりも女性の方がどの年齢でもスコアが低く、男性よりも女性の方が社会的責任のある生活よりも気ままな生活を求める傾向が強いことが示唆される。これらの

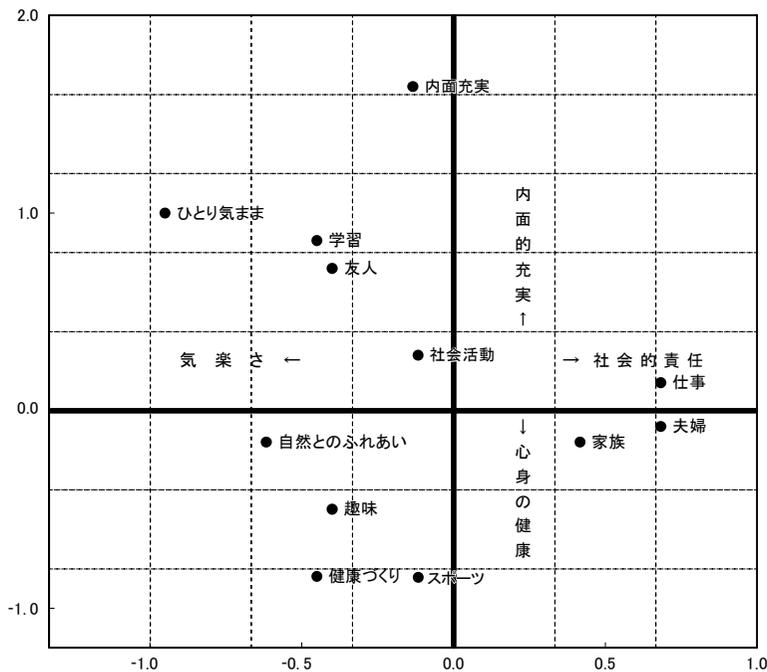


図1 生きがい対象のカテゴリの空間的配置

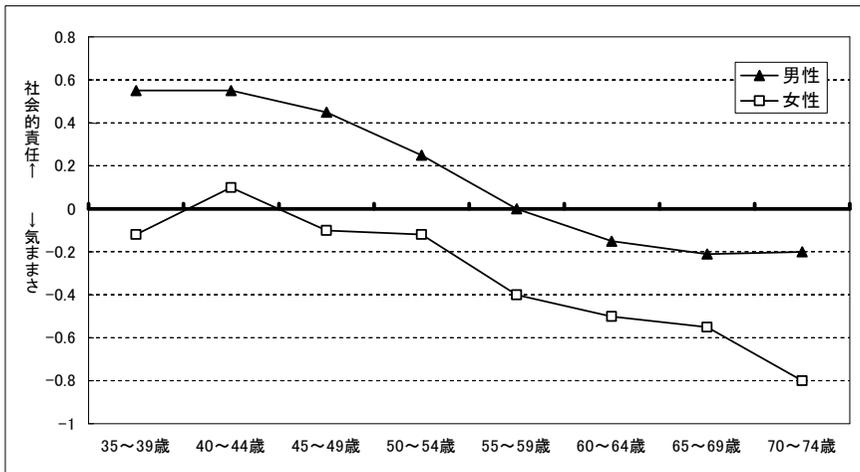


図2 気ままさ対社会的責任の因子得点の年齢差・性差

年齢差と性差は統計的に有意であった（年齢差： $F(7, 3090)=28.94$ 、 $p<0.001$ ；性差： $F(1, 3090)=131.03$ 、 $p<0.001$ ）。交互作用は認められなかった。

他方、心身の健康づくり对内面的充実の尺度のサンプルスコアの年齢曲線を男女別に示したものが、図3である。男性と女性で年齢曲線がやや異なる。女性は年齢が上がるとともに内面的充実から健康づくりの方へ移行する傾向がうかがわれ

る。それに対して、男性は若い頃から内面的充実を求める傾向が弱く、年齢が高くなるとともに健康づくり志向が強まってくる傾向がうかがわれる。年齢差と性差が統計的に有意であった（ $F(7, 3090)=12.66$ 、 $p<0.001$ ；性差： $F(1, 3090)=161.10$ 、 $p<0.001$ ）。交互作用は認められなかった。

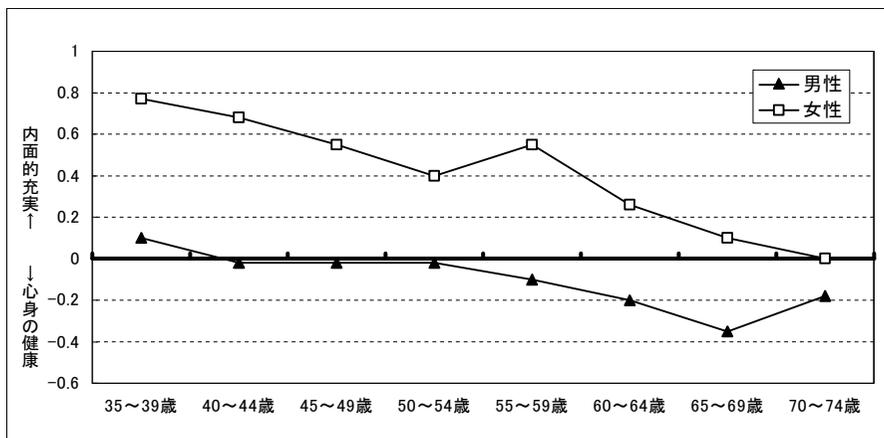


図3 心身の健康对内面的充実の因子得点の年齢差・性差

考 察

等質性分析の結果、日本のサラリーマンの生きがい対象の背景には、2つの異なる尺度の存在が示された。すなわち、ひとつは、仕事や配偶者・家庭など社会的責任のある生活に生きがいを感じているか、それとも社会的責任のない気楽な生活に生きがいを感じているか、を判別する尺度である。もうひとつは、内面的充実の生きがいを感じているか、それとも心身の健康づくりに生きがいを感じているか、を判別する尺度である。

そして、これらの尺度の構造から、生きがいの対象がアンビバレントな関係にあることが示唆された。すなわち、仕事や家庭など社会的責任ある生活の方向で生きがいを感じている場合は、ひとり気ままな生活の方向で生きがいを感じることは難しい。逆に、ひとり気ままな方向で生きがいを感じている場合は、仕事や家庭など責任ある生活の方向で生きがいを感じることは難しい。同様に、内面的充実の方向で生きがいを感じる場合は心身の健康づくりの方向で生きがいを感じることは難しい。逆に、心身の健康づくりの方向で生きがいを感じる場合は内面的充実の方向で生きがいを感じることは難しい。

このように欧米の主観的幸福感スケールなどと異なり、生きがいを感じる対象のカテゴリーが拮抗的なかたちで表れたことについては、限定回答法によるデータの収集、カテゴリカルデータの分析法である等質性分析を適用など方法論的相違が大きいので直接的に比較することはできない。しかし、こうした結果の違いはたんに調査方法や分析方法の違いに起因しているだけではなく、日本人のアンビバレントな生きがいの質の違いをそれなりに反映していると考えられる。また、そうしたアンビバレントな生きがいの質の違いを反映させることができるという意味では、シニアプラン開発機構の生きがい調査のような限定回答法や等質性分析がそれなりに有効であると考えられよう。

また、等質性分析から得られた2つの尺度と年

齢、性別との関連を検討した結果、男女とも年齢が上がるとともに仕事や家庭など社会的責任のある生活から気ままな生活へ移行する傾向がみられた。また、男性よりも女性の方が社会的責任のある生活よりも気ままな生活を求める傾向が強いことが示唆された。

この結果は、若い頃は社会的責任のある生活に生きがいを感じるが、年をとるにつれて気ままな生活の方がよくなっていくことを反映しているとみられる。また、男性よりも女性の方が社会的責任のある生活よりも気ままな生活を求める傾向が強いのは、サラリーマンの場合、女性は男性に比べて社会的責任ある地位についている人が少なく、そうした社会的地位の男女差が多分に影響している推測される。

内面的充実VS心身の健康づくりについてみると、男性と女性で年齢曲線がやや異なる点が注目される。女性は年齢が上がるとともに内面的充実から健康づくりの方へ移行する傾向がうかがわれる。それに対して、男性は若い頃から内面的充実を求める傾向が弱く、年齢が高くなるとともに健康づくり志向が強まってくる傾向がうかがわれる。男女とも年齢が上がるとともに健康づくりの方へ移行する傾向がある点に関しては、年をとるとともに健康面の低下が大きくなっていくことから首肯できよう。ただし、男性が若い頃から内面的充実をさほど望まず、健康づくり志向が強いとみられるのは、女性にくらべてそれだけストレスを受けているのかもしれない。

謝辞 本論文は、シニアプラン(2003)の調査報告書の一部に加筆修正したものである。「サラリーマンの生きがい調査」に参加させていただくとともに、今回、データの追加分析の機会を与えていただいた財団法人シニアプラン開発機構に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 東清和 1999『エイジングと生きがい』東清和
(編)「エイジングの心理学」早稲田大学出版
部, Pp.131-168.
- 石村貞夫 2001 SPSSによるカテゴリカルデー
タ分析の手順, 東京図書, Pp.140-155.
- 古谷野亘 1981 生きがいの測定—改定PGCモ
デル・スケールの分析—, 老年社会科学,
3: 83-95.
- 古谷野亘 2003『サクセスフル・エイジング』
古谷野亘・安藤孝敏(編著)「新社会老年学」
Pp.141-163.
- Larson, R. 1978 Thirty years of research on the
subjective well-being of older Americans.
Journal of Gerontology, 33:109-125.
- Lawton, M. P. 1975 The Philadelphia Geriatric
Center Morale Scale : A reversion. *Journal of
Gerontology*, 30:85-89.
- Meulman, J. & Heiser, W. 2001 SPSS Categories
11.0 SPSS Pp.183-196.
- Neugarten, B. L., Havighurst, R. J., & Tobin, S.
S. 1961 The measurement of life satisfaction.
Journal of Gerontology, 16:134-143.
- 西村純一 2005 サラリーマンの生きがいの構
造, 年齢差および性差の検討 東京家政大学
紀要第45集 (1), Pp.207-212.
- シニアプラン開発機構 1992 第1回サラリーマ
ンの生活と生きがいに関する調査: サラリー
マンシニアを中心にして.
- シニアプラン開発機構, 1993a, 第1回サラリー
マンの生活と生きがいに関する調査: 第2次
調査.
- シニアプラン開発機構 1993b 生きがいに関す
る研究会最終報告書—サラリーマンシニアの
生きがい創造に向けて.
- シニアプラン開発機構 1997 第2回サラリーマ
ンの生活と生きがいに関する調査: サラリー
マンシニアを中心にして.
- シニアプラン開発機構 2002 第3回サラリーマ
ンの生活と生きがいに関する調査: サラリー
マンシニアを中心にして.
- シニアプラン開発機構 2003「サラリーマンの生
活と生きがいに関する調査」のフォローアッ
プ調査.
- 杉山善朗・竹川忠男・中村浩・佐藤豪・浦沢喜一・
佐藤保則・斉藤桂紀・尾谷正孝 1981 老人
の「生きがい」意識の測定尺度としての日本
版PGMの作成(1)—尺度の信頼性および因
子の妥当性の検討—, 老年社会科学, 3: 57
-69.